ふるさと紀行

コトコト・トロッコ列車、終点の町
メルヘンチック・高森

高森町

TAKAMORI

高森駅は間伐材を利用した阿蘇山がモチーフのお洒落な駅舎。木の香漂う建物の中は産業観光館にもなっていて、いろんな情報の発信ステーションとなっている。

コトコト　コトコト
「たかもりー、たかもりー」
トロッコ列車がゆっくり入ってきた。
終点高森駅。立野から約一時間、爽やかな夏の風を受けて走るトロッコ列車。
南阿蘇メルヘンの旅の終着駅である。

高森町。人口約八千七百人。古くから県境の要地・南郷谷の中心として栄えてきた。七百年もの歴史を誇る色見の田楽もこの地の特産である。

「南阿蘇がひとつの大きな遊園地なんですよ。だから、それに、こんな列車を走らせたら非常にカワイイだろうな――そんな夢みたいな考えが、トロッコ列車の始まりだったんです。」

トロッコ列車の生みの親である南阿蘇鉄道常務の矢野光晴さんは、一瞬、少年のような笑顔を浮かべた。

国鉄高森線の後を受け、昭和61年に開業した南阿蘇鉄道。トロッコ列車は、その観光の切り札として登場。二両編成百二十人乗りのちっちゃな車両は、休日になると一日一往復の運行では賄いきれないほど、親子連れで賑わう。既に、ここが南阿蘇観光の目玉になっている。「座りきれなくて、お断りする場合もあるんです。」駅員が申し訳なさそうにそう話してくれた。

高森駅から車で15分。右にラクダ山、前方に根子岳、かわいいペンションの家並みが続く。オレンジ色の屋根が見えてきた。イタリー風の建物に、石畳の小道。このペンションのオーナー二村正記さんは、三年前に大山からこの地に移ってきた。

「あちこち旅行してたんですけど、南阿蘇って自然のまんまでしょう。変に観光開発されていないし。それと、実はラクダ山が気に入りましてね。こういう山は、よそにはないんですよ。根子岳が真正面に見えて、ラクダ山が見える――風景としては最高じゃないかな。」

景色を眺めながら、のんびり一日を過ごす。自然を求めて集まってくるお客様のためにも石畳の石（阿蘇山の石。オーナー自らが敷きつめた）ひとつにもこだわる。

「舗装道路じゃ、だいなしですよ。なるべく自然の中で邪魔にならないようにしたい。せっかくのすばらしい風景を壊したくないから…。それに、ペンションはオーナーの家でもある。自分たちがずっと住んでいたい所ですよ、ここは。」

高森の大自然に魅せられた人々の姿が、そこにはあった。

緑の間から顔を覗かせている〝はなしのぶ〟――九州にしかない貴重な花である。毎年6月南阿蘇国民休暇村「野草園」で「はなしのぶコンサート」が開かれる。「野の花たちに捧げる音楽祭」として、多くの人々の耳を楽しませるようになって9年目。すでに、初夏の阿蘇の風物詩である。組曲「はなしのぶ」の美しさは、以前この地を訪れた昭和天皇が深く感動され、お歌を詠まれたほど。

はなしのぶの歌
しみじみ聞きて生徒らの
心は花の如くあれと祈る

「車両をあと二両ぐらい作って、もっといっぱい繋げて走らせたいですね。そして、ここから国民休暇村まで走らせたい。そんな本当に夢みたいな希望があるんです。」矢野さんの声が蘇ってくる。ふるさとの山根子岳。薄紫の可憐な花〝はなしのぶ〟の咲く町、高森。今、皆の夢を乗せて、メルヘンチックな夏がやってきます。

✝はなしのぶコンサート
6月25日(日)　南阿蘇国民休暇村「野草園」
㊐お問い合わせ（0967 6）2-2111
南阿蘇国民休暇村

KOTOO♪KOTOO♪KOTOO